

日本人の起源に関する諸説紹介

平成 17 年 2 月 26 日 安倍富士男

参考文献：日本人の起源（池田次郎 講談社現代新書 昭和 57 年）
池田次郎（東大理学部卒 京都大学理学部教授 自然人類学）

これまでの日本人起源に関する学説と提唱者、根拠
ここで紹介されているのは、主に人類学からの説である。他に、言語学、民俗学、遺伝子学、考古学からの主張があるが、ここではふれない。人類学では主に縄文、弥生の人骨研究から科学的、統計的に起源を考察したものが多
い。

- 江戸時代まで **神話の時代**
記紀神話を信じていた。
記紀神話とは、日本書紀、古事記にある日本人、日本国建国神話。アマテラスオホミカミによる建国。国学（日本のことをもっと知ろうという学問 中心は日本書紀、古事記の研究）の影響が。
- 江戸寛政年間 **疑問の時代**
古代の遺物が多く出土し、日本人の起源について多くの疑問が出てきた
- フィリップ・シーボルト **アイヌ説** 「日本」
石器時代には、アイヌが日本全土を締めていたが、神武天皇に率いられた日本人の祖先にアイヌは駆逐された。というもの。
- ハインリッヒ・シーボルト **アイヌ説** 大シーボルトの次男
石器時代の貝塚を作った先住民アイヌは、大陸から進入し古墳文化を築いた金属器時代人に征服された。
- 明治 10 年 モース **プレ・アイヌ説** 東京大学動物学教授 大森貝塚発見者
根拠：大森貝塚にあった土器制作と食人風習がアイヌにはないことから別種と考えた。
石器時代人はアイヌ以前に日本に存在した別の人種である。これをプレ・アイヌと呼ぶ。
プレ・アイヌはアイヌによって駆逐された。
アイヌは日本人の祖先によって駆逐された。

プレ・アイヌ説
モース
少数派

VS

アイヌ説
小シーボルト
ミルン（日本地震学育ての親）
ディッキンス（日本文学研究者）
多数派！！

の論争開始

論点：1 アイヌは土器制作者だったか？
2 食人風習の常習者だったか？
3 大森貝塚は先史時代の遺跡か？
ここまでが、欧米学者が論争の中心の時代。
日本人が日本人の起源に関する議論に入る能力はなかった。

日本人学者の登場

プレアイヌ説
モース（東大動物学）

VS

アイヌ説

コロボックル説
坪井正五郎（東京大学人類学教室創設者）へ引き継ぐ

6 坪井正五郎 **コロボックル説** 東京大学人類学教室創設者
3000 年前にはコロボックルは日本全土に存在していた。
コロボックルはアイヌや日本人とも異なっていた。どちらかというところエスキモー民族に近い。
コロボックルはアイヌによって、北方へ追いやられ、アイヌも日本人の祖先が日本に到達したときに、北方へ追い
やられた。

コロボックルとは何か？
アイヌの伝説に語られている北海道先住民。背が低く竪穴住居に住み石器や土器を作っていた。
しかしいつの間にかどこかへ消えてしまった。
寛政年間の書物にもコロボックルは出てきている。

このコロボックルの様子は、「極北生活 40 年」というヨーロッパ人のノンフィクション伝記に出てくるエスキモーの描写とそっくりである。（安倍）

コロボックル・アイヌ論争

コロボックル説支持者
坪井正五郎（東京大学人類学教室創設者）
アイヌ説支持者
鳥井龍蔵（坪井の愛弟子 人類学者）
小金井良精（よしきよ 坪井の親友 東京大学初代解剖学教授）

大正中頃、縄文と弥生の 2 系統の存在が明らかとなったため、アイヌ説が不動の地位確立
コロボックル・アイヌ説論争は 20 年間続いたが、大正初年、坪井の死によって論争が終了し、アイヌ説が優勢となる。

7 鳥井龍蔵 **アイヌ説** （坪井の愛弟子 人類学者）
根拠：縄文文化と弥生文化は人間の骨格などの体質はもちろん、文化的にも区別されるべき。
従って、両文化は相互に移行関係にあるのではなく、不連続なもの。
従って、縄文文化の遺跡を残したのは先住民族のアイヌである。
北方から沿海州、朝鮮半島を経て弥生式土器を持ち込んだ 現代日本人へ。

ここまで見てきたアイヌ説、コロボックル説もどちらも人種交代説と呼ぶ。
基本的には、先住民を駆逐し、本州の中心部を占拠したのが日本人であるという点で一致しているから。

人種交代説	アイヌ説
	コロボックル説

8 清野謙次 **移行説** 大正末から昭和にかけて 京都大学病理学者
昭和 24 年「古代人骨の研究に基づく日本人種論」発表
石器時代には地方差、時代差があっても等質の日本石器人が存在していた。
他種属との混血はあっても、体質を変えるほどの大規模な混血は起こらなかった。
石器時代から金属器時代に起きたためざましい体質の差は、混血だけが原因ではなく、生活形態の変転が主要因である。

9 長谷部言人（ことんど） **移行説** 人類学者 東京大学人類学科教授
はじめ東北大学教授、それから東京大学に移り人類学科を開設
日本人類学会会長を長年務める 戦中戦後の日本人起源論をリードする
昭和 24 年「日本民族の成立」
縄文人と古墳時代人の骨の著しい変化の原因は、生活形態が変わったために起きた咀嚼力、筋力によるもの。
狩猟採集生活（石器時代）から稲作農耕生活（金属器時代）に変化するに伴って、咀嚼力や筋力が減少したために、骨格にも影響を及ぼしたとする。

日本人の体質を一変させるほどの大規模な混血はない。
日本人は石器時代から遺伝的に連続している。

ここまでの説を以下のようにまとめることができる。移行説が優勢を占めた。

人種交代説	アイヌ説	シーボルト親子・鳥居・小金井
	コロボックル説	モース・坪井
混血説	特定の時代に混血を認める	金関
移行説	特定の時代に混血を認めない	長谷部・鈴木

10 金関丈夫（かなざきたけお）渡來說 京都大学解剖学初代教授
根拠：山口県土井ヶ浜、佐賀県三津から出土した大量の弥生人骨の研究を行った。
主張：九州南部の南九州人は土着の縄文人の直径と考えると良い。
九州北部と山口県地方では縄文人と弥生人の間に明確な断絶がある。
これは朝鮮半島からの渡来人を認めない限り説明は不可能である。
日本人の原型には渡来人の影響があったとする説

11 鈴木尚（ひさし）移行説 東大医学部で小金井に、東大理学部人類学教室で長谷部に師事
根拠：中世、近世の大量の人骨を研究
主張：日本人の骨格形態の大変化はこれまで2回あった。
1回目：狩猟採集生活から農耕生活にかけての変化があった弥生時代
2回目：封建社会から近代文明社会へ変化した明治維新
2回目の明治維新の例から明らかのように、混血が働かなくとも骨格形態の変化はあるから、
弥生時代の変化も渡来を考える必要はまったくない。
昭和30年代までに金関の渡來說、鈴木の移行説も完成した。

清野、長谷部、金関、鈴木4者の共通点：日本人の系譜は縄文までにたどることができる。
移行説が学界の正当派とされた。混血説は「古典的学説」と呼ばれ、少数派とされた。

12 昭和50年代 渡來說が復活し、渡來說と移行説の合体論が主流となる。議論に終止符か？
ここまでのまとめ！（清野の移行説は、27pでは混血説と紹介されているのでそのように分類しておく）

人種交代説	アイヌ説	シーボルト親子・鳥居・小金井
	コロボックル説	モース・坪井
混血説	特定の時代に混血を認める	清野
移行説	特定の時代に混血を認めない	長谷部・鈴木
渡來說	朝鮮半島からの渡来人を想定	金関・鈴木

13 池田次郎 東大理学部卒 京都大学理学部教授 人類学者
問題点指摘：
1 混血説、移行説、渡來說にしても生活様式の変化が体質の変化をもたらすという、生活と身体の関係性を重視している。しかし、すべての形質変化が生活の変化に原因を求めることができるのか？ また日常生活の変化が身体や顔をどのように帰するのか？この2点が明確に説明されていない。
2 渡來說の問題点：混血による効果はどれほどのものか？ まだ明らかにされていない。

14 1990年 埴原和郎（はにはらかずお）二重構造モデル 東京大学名誉教授
歯の分析を専門とする形態人類学者

根拠：約四千体の古人骨のデータを統計学的手法で分析した結果
主張：現日本人は東南アジア系の人々が原型になり、縄文人となった。その後、いわゆる弥生時代になって北東アジア系の人々が渡来し、在来（東南アジア系＝縄文人）の人々と混血して現代の本土に住む日本人を形成した。縄文系と渡来系の混血は近畿から離れるほど遅れたが、混血は今も進行しており日本人は、渡来した北東アジア系と在来の東南アジア系の2つの集団からなる二重構造が考えられる。在来系の形質を比較的残しているのがアイヌと沖縄の人々である。
（三内丸山は語る 縄文社会の再検証 久慈力 新泉社 2000年より引用）